

# 内モンゴル自治区の 宗教信仰の発展の趨勢および問題点

梅 花(メイホア)

## はじめに

本稿では最初に内モンゴル自治区における最近十年の宗教信仰のおおよその状況及びその変化を整理するが、その中には現有の主要な四宗教の七種の教派の各項目における数量変化と信仰習俗の変化についての個別的分析が含まれる。その次に内モンゴル自治区における各種宗教が直面している主要な問題を指摘し、さらにこれらの問題が発生した原因の分析を試みる。

## 1. 宗教信仰の発展の現状および新たな趨勢

内モンゴルでは現在4つの主要な宗教が存在する。仏教、キリスト教、イスラーム、道教である。仏教はチベット仏教と中国仏教を含み、キリスト教はプロテスタント、カトリックと東方正教会を含んでいる。最近十年における各宗教の現状は下表の如くである<sup>1</sup>。

表が示すところの全体的状況から見れば、最近十年の発展が順調なのは仏教とプロテスタントであり、その次はカトリックと道教で、イスラームと東方正教は大体において現状を維持している。

仏教の発展の面については、チベット仏教か中国仏教かに関わらず、信仰者数は明瞭に増加している。内モンゴル自治区の仏教信者について言えば、宗教界及び宗教管理機構あるいは研究機関を問わず、今に至るまで未だ正確な人数が統計されていない。表で示している2009年の信仰者が30万人であるというデータは、1996年のおおよその統計データに基づくものとのことであり、現在の実際の数字はこれに止まらないはずである。今年正月15日のわずか一日でフフホト市の大召寺に13万人が集まっており、不測の事故の発生を防止するために、大量の警察力を動員して安全を維持する業務を行わせた。

フフホト全市のチベット仏教のいくつかの寺院において正月15日に集まった人数は30万人に達し、中国仏教の寺院に集まった人数も多く、観音寺に正月15日に集まった人数だけで20万人に達している。包頭の妙法寺では重要な仏教記念日があるたびに集まる人数は

<sup>1</sup> 当該の表中の2005-2009年のデータは『内モンゴル自治区志・宗教志』から抽出したもので、2015年のデータは各宗教協会が2015年4月に提供した資料からであり、疑問符が付せられている箇所はおおよその概算値である。

	活動拠点数			聖職者数			信者数	
	2006年	2009年	2015年	2005年	2009年	2015年	2009年	2015年
チベット仏教	127	163	163	僧3004, 活仏14	僧3800, 活仏14	僧2600, 活仏12	30万	200万?
中国仏教	52	95	98	171	220	400	10万	300万?
イスラーム	177	181	193	アホン535	アホン516	アホン379	21万	21万
プロテスタント	315	545	570	671 (全ての 聖職者)	牧師42, 長老131	牧師75, 長老259	20万	26万
カトリック	163	163	166	187	230 (司教3, 神父118, 修道女109)	253 (司教3, 神父116, 修道女134)	20.5万	20万前後
道教	2	4	4	道士7	道士7	道士6	500	3000
東方正教		1	1	0	0	0	732	732

一日で6-7万人に達している。各大寺院の重要な仏教行事の日にも参拝者が多すぎるために問題が生じる光景が出現し、そのうえ辺鄙な農業、牧畜地域の寺院への参拝客も明瞭に増加しており、これは仏教が一層人々の歓迎を受け、影響が日増しに拡大していることを表している。

ここ何年かで発展が順調なものにプロテスタントがあり、現在まで全地域的な規模で教会堂、信徒、牧師、長老の人数が明瞭に増加している。とりわけ活動拠点<sup>2</sup>の増加は相当に多く、フフホト市内のキリスト教プロテスタント所属の活動拠点のみで30ヶ所ほどに達し、全地域ではおおよそ480ヶ所が存在する。

内モンゴルのカトリックには五ヶ所の教区が存在する。フフホト、包頭、集寧、赤峰、バヤンノールである。フフホト教区はフフホト市、オールドス市、シリント市、フルンボイル市などの地域のカトリックの宗務を管轄する。フフホト市には三つのカトリック総教会堂があり、それぞれの教会堂の下には3—5ヶ所の活動拠点がある。信者の数はここ数年は大きな変化がなく、カトリック教会の関係筋の説明によると、毎年の逝去した信者と新しく増えた信者の数はほぼ同じとのことである。

内モンゴル自治区には現在回族のムスリムが21万人余りおり、このほかにアラシャン盟には2000人ほどのモンゴル人のムスリムがいる。イスラームの信者は未だに統計されていないことにより、上の表で挙げた21万人のムスリムは全地域の回族人口の数を表している。実際には、イスラームの信者とムスリム系民族の人口の数は同様の概念とみなすべきではなく、その中に未成年は統計に入れるべきではなく、その地域に戸籍はないものの、比較的長期間居住していたり宗教活動に参加している外来の信者は統計に入れるべきである。

<sup>2</sup> 活動拠点とは正式な教会堂ではなく信者が一時的に集まる場所である。

道教は早くから内モンゴル自治区に伝来しており、土地改革運動と解放の初期まで、全地域で記載あるいは伝承されていた道観は少なくとも50カ所余りが存在し、その中でフフホト市には18カ所、包頭には9カ所、赤峰市には11カ所（紅山区には8ヶ所あり）、通遼市には8カ所（その中で開魯県に6カ所あり）、フルンボイル市には4ヶ所、バヤンノール市には2カ所、オールドス市には1カ所が存在していた。1995年以後陸続として4カ所の道観が登録開設され、現在宗教活動を行っているが、これらの道観はフフホト市に3カ所、オールドス市のウーシン旗に1カ所存在している。

東方正教は19世紀末から20世紀初めに至ってフルンボイル地域で布教が開始され、教会はかつては38存在していた。1950年代になり、大部分の居留ソ連人の出国にともない、ほとんど全ての東方正教の聖職者は出国し、教会は消滅した。2009年8月自治区政府宗教局の許可を経て、エルグナ右旗の東方正教の教会が登録開設されたが、今に至るまで聖職者は存在せず、信者の民主的選出によって組織された教務管理委員会が当該教会堂を管理しており、また内モンゴル東方正教会も成立していない。

以上に述べたのは内モンゴル自治区の各主要宗教の場所・聖職者及び信者のおおよその状況であり、このほかに信仰習俗と信仰観念の面から各種の宗教が相互に融合し影響しあう現象が出現しており、民間にも多様な民間信仰をもって一身に統合した各種の「神仙」が出現している。

仏教とキリスト教、仏教と道教、仏教と民間信仰の間において宗教用語と宗教概念の相互借用の現象が発生することにより、新しく流布している宗教は固有の宗教文化の蓄積を利用することで自身の影響力を強化し、固有の宗教は新しい宗教用語を借用することで内在的要素が新たに開拓される。

例えば、N女史は、モンゴル人、57歳、ホルチン左翼中旗の人である。彼女が筆者に自己紹介したとき、自身はキリスト教を信仰していると言っており、キリスト教徒である。筆者が彼女にいつから信仰し始め、どのような理由によりキリスト教への信仰を開始したのかを質問したとき、彼女は次のように答えた。「3年前にキリスト教への信仰を開始した。以前において私は仏教徒であったが、3年前に私が病気になって街の病院に入院したとき、同じ病室で一人の漢人の患者と会ったが、彼女はほかの仏を信じていると言い、彼女は私が信仰している仏をすてるように勧めたので、彼女が信仰している仏に変えた。彼女が信仰している仏は非常に不思議な力があり、患者は信仰さえすれば病気が治るとのことだった。彼女はまた私が信仰している仏はただ来世のことだけに関与するのみで、今生のことに対しては何の救済の力もないが、もし彼女が信仰している仏に変えれば今生で得度できると言った。私は彼女のこの話を聞いてから自分が以前信仰していた仏像を捨て、改めて十字架を信仰しはじめた」。筆者がN女史に「あなたが現在改めて信仰しているのも仏です

か？」と質問したとき、彼女は非常に明瞭に「これも仏です。ただ以前の仏とは違うのです」と答えた。両種の仏は結局のところ何の違いがあるのかに関して、N女史はただ入院中に知り合った友人の話に従って、「以前の仏はただ来生に関与するだけでしたが、現在信仰している仏は今生現世を加護できるのです」と言うだけだった<sup>3</sup>。

これは明らかに「仏」の語を別の信仰の文脈に借用し、幾つかの内容を加えており、仏教信仰の中における「仏」とキリスト教信仰の中における「仏」は同一の単語であるけれども、イメージは「仏像」から「十字架」へ変容しており、内容面においても新たな解釈がある。固有の名詞を借用して新たな事物を説明することは、人に容易に信仰を受け入れさせる簡単な方法である。

またある調査の中で筆者は一人の22歳の女性が胸の前に護符をつけているのに気づき、質問がその来歴と名称に及んだ時にその女性は次のように説明した。「これは太上老君の像で、ある僧侶が私たちの村にきて仏法について講釈したとき私が彼を招いた際に、僧侶が私たちに読経して開眼してくれたものです」<sup>4</sup>。この一つの例も道教と仏教における信仰の混合の現れであり、二つの異なる宗教信仰が相互に融合した結果である。

別の一人の女性は風水による占いをしており、彼女は自己紹介の時につきのように述べた。「私の“大爺”ラマの靈魂が私に憑依して、自分は私たちの家族の中で第七代の伝承者と見なされ、私はほとんど死にそうになるという代価を支払って神霊を受け入れたので、神霊は私の体に憑依した。私が信奉するのは“大爺”ラマの靈魂であり、また鷹神、烏神、黒龍王、白龍王、狐仙、牛鬼神などがいる。これらの神を私は乳製品、菓子と白酒でもって祭祀し、“赤いたべもの(肉類)”は用いない。シャーマンは“赤いたべもの”をもって祭祀を行うことができるが、私たちにはできない」<sup>5</sup>。筆者がY女史の家で供養されている神像を見に行ったところ、彼女が普段供養している神像は部屋の西の壁の位置にもたれかけられて、上下両層に分けて置かれていた。上部は観世音菩薩、伊娃娘娘<sup>6</sup>、薬師仏、文殊菩薩、下部に置かれているのは財神爺関公、弥勒仏、如来仏、黒龍王神、パンチェン大師・大爺ラマ像等で、ここには仏教、シャーマニズムとその他の民間信仰による各種の神仙像が存在している。

Y女士の述べた「靈魂の憑依」はシャーマニズム信仰の概念であるが、しかしながら彼

<sup>3</sup> 筆者の2012年8月初旬のホルチン左翼中旗での調査時における取材記録に基づく。

<sup>4</sup> 筆者が2015年5月初旬にフフホト市でインタビューした一人のジャロード旗の女史の記録による。

<sup>5</sup> 筆者が2012年8月初旬にホルチン左翼中旗において行ったフィールドワーク時の記録に基づく。

<sup>6</sup> 伊娃娘娘とは一つの女神とY女士が説明した。

女はまた自身に憑依したのは“大爺ラマ”の霊魂であると解釈している。明らかに彼女は仏教とシャーマニズム信仰を一個の「複合体」として結合させているのである。

各主要宗教が正統派の伝統を保持し発揚しようと努力しているのと同時に、またいくつかの多種の宗教信仰が混交して一体化する多元的で複雑な新しい信仰の変化が出現しており、このような現象の社会文化的背景及びその影響は更なる探究に値するものである。

## 2. 普遍的に存在する問題

内モンゴルの各宗教間では協調、共存の状態が出現しており、宗教によって惹起される大規模な宗教問題あるいは社会矛盾は出現していない。しかしながら日常の管理と宗教の基本理念に相対する面においては、比較的多くの早急に改善すべき問題が存在している。ここではその中の比較的一般に存在する問題を検討する。

### (1) 聖職者の後継不足

聖職者の不足は各主要宗教において普遍的に存在する問題であり、仏教とカトリックにおいて最も深刻になっており、またイスラーム、道教、東方正教、プロテスタントにおいても同様の継承者の欠乏の問題が存在している。

チベット仏教においては、後継者の欠乏は非常に解決困難な問題である。数年前と比較して、現在における僧侶の人数はすでに三分の一に減少した。寺院は若年の僧侶を招請できずにいるが、その原因は多方面にある。一人っ子の家庭の増加や、僧侶の経済収入がきわめてすくないこと、いまだに社会保障、医療保障、最低生活保障等が解決できない寺院が多く郊外の辺鄙あるいは農村に位置していること等である。

内モンゴルでは目下のところ、自治区党委と政府の承認で設立され、内モンゴル仏教協会によって開学した内モンゴル仏教学校があり、学習年数は3年である。1987年の設立以来、3年ごとにモンゴル語講義の課名で学生30人を募集採用し、現在まで合計で340名の僧侶を養成しており、その中の少くない者が現在各寺院の管理業務を担当している。同校が各寺院より推薦された僧の中から新入生を募集していることにより、寺院の若年の僧の募集採用がますます困難になるに従って、今後僧侶確保の基盤は大きな問題に直面することになる。聖職者の欠乏により、宗教のローカライズ化をすすめるのにも支障がでる。現在においてはメルゲン廟、オラト前旗公廟、オラーンホト王爺廟、オンニョート旗梵宗寺などの数か所の寺院でモンゴル文を用いて読経するのみであり、その他はみなチベット文で読経している。

カトリックもまた深刻な後継聖職者の欠乏に直面している宗教である。1985年開学の「聖哲学校」は、学生確保の基盤の不足によってすでに十年近く活動を停止している。内モンゴルからの聖職者の供給源の不足により、現在では多く他地域より神父を招請している

が、経費が高いうえに人員も安定しない。これにより、長期的発展の観点からは、当地での後継聖職者の育成を重視するべきである。

イスラームも自身の地区のモスクにおいては多くはただ一人のアホンが宗教活動を司るのみで、後継者は欠乏している。主な原因としてはモスクは自活が困難で、アホンの生活費用を負担する力がないうえに、多くのアホンは子女の数が多いため、家庭の負担は重く、生活の障もなく、宗務に専心できない点が挙げられる。フフホト市は率先して宗教聖職者の社会保障のための業務を展開し、費用は全て政府が支出し、現在のところ全市の聖職者の社会保障への登録処理業務は基本的に完成しており、模範先導的な機能を発揮している。

### (2) 宗教団体の各組織における特性の問題

内モンゴル自治区における各愛国宗教団体は合計で6組織が存在する。すなわち内モンゴル仏教協会、内モンゴル・イスラーム協会、内モンゴル・カトリック愛国会、内モンゴル・カトリック教務委員会、内モンゴル・キリスト教「三自」愛国運動委員会、内モンゴル・キリスト教協会である。盟、市、旗、県には宗教団体が50あまり存在している。これらの愛国宗教団体は政府と民間機構の中間に位置し、政府機構ではないが、純粋な民間機構でもない。

内モンゴルでは、政府は経済面においては各協会に5人ずつを基準として、一人当たり毎月3000元を与える生活補助方式をとり、財政から支出して援助を与えてはいるけれども、部門が事業的性格を帯びていないことにより、実際の業務においていささか不都合が生じている。政府の面について言えば「宗教事務条例」と各項の法令を施行する際に法執行の主体が存在せず、宗教業務ごとに多部門の調整を得てようやく処理を完成させることができるという状況であり、個別の部門はみな主体的に業務を処理できる単位ではないのである。宗教団体は法人の資格を有さず、宗教活動場所の所有権は、宗教で異なる。各宗教の具体的状況の不一致により、画一的な解決方法を採用することでもたらされる結果は往々にして弊害の方が利益よりも大きい。宗教団体自体について言えば、正式編成の問題により人材が留められず、それぞれの業務の展開に際して労力の投入は大きいが効率は低い。

### (3) 宗教に民族的特色を持たせる活動に対する支援不足

宗教のローカライズ化の過程を進めるために、また信者に宗教の教義をより正確に理解させるために、各宗教の経典の原典の翻訳を重視すべきであり、その中にはチベット仏教経典のモンゴル語訳とプロテスタント、カトリックの『聖書』のモンゴル語訳も含まれ、チベット仏教の寺院であるにせよ、キリスト教の教会であるにせよ、モンゴル語による読経・朗読活動を広く展開する必要がある。モンゴル人のチベット仏教の特色を十分に示すために、まずモンゴル語による読経を発展、普及させる必要があるが、モンゴル語の読経の継承は人力や財力による影響を受け、遅々として進まない状況である。目下のところ内モン

ゴル全体では、うえでものべたように、メルゲン廟等のわずか数か所の寺院においてのみモンゴル語による読経が行われているに過ぎない。

プロテスタントとカトリックの教会においては、現在のところモンゴル語訳された経典は未だ存在せず、一部の地方のモンゴル人信者は解放前に翻訳された古い版のモンゴル語『聖書』中から抄録されてきたもので一時的な必要を満たしている状態である。2015年4月に一人の内モンゴル・キリスト教協会の牧師に取材を行った際、彼は筆者に『聖書』のモンゴル語訳業務の重要性と緊急性を強調し、さらにこの面における仏教と同様の人力と財力で直面している困難な現状についても述べた<sup>7</sup>。

## おわりに

数や規模の面から見れば、内モンゴル自治区において最近十年で発展が順調なのは仏教とプロテスタントであり、その次に位置するのはカトリックと道教であり、イスラームと東方正教会は基本的には現状維持である。内モンゴルの各宗教間においては調和・共生関係の状態が出現しており、宗教によって引き起こされる大きな宗教問題あるいは社会矛盾は出現していない。信仰習俗の面においては、各代表的宗教は正統的な教理の伝統を維持し発揚しようと努力している途上であり、それと同時にいくつかの多種の宗教信仰が混成して一体となった多角的で複雑な新たな信仰変化の状況が出現しており、この現象の社会的文化的背景及びその影響についてはさらなる考察を行うに値する。

また日常の管理と宗教への扱いに対する基本的認識の面については、幾多の急を要する改善の問題が存在する。これらの問題は、党の数多い宗教管理業務中の一部分に過ぎないことではあるが、内モンゴル自治区の宗教界にとっては信仰に関わる根本的問題と言えるのであり、民俗宗教のアイデンティティについては国家のアイデンティティにも関わる問題である。基本的な活動を適切に行い、根本的な問題を的確に解決して、はじめて宗教が社会的道徳と精神文化の建設の中で積極的な作用を発揮することができるのである。このようにしてこそ中国の宗教は最適な協調の様相を世界の前に表すことができ、世界平和と発展を前進させることができるのである。

## 付記

拙文を日本語に訳してくださった片桐尚先生に深く感謝を申しあげる。本論文は教育部重点研究基地蒙古学研究中心社科一般項目「内蒙古自治区宗教信仰调查研究」の成果である。

(内モンゴル大学民族学社会学学院・副教授)

<sup>7</sup> 筆者が2015年4月24日に内モンゴル・キリスト教会においてG牧師に取材した際の記録による。